

【研究ノート 8】

釈迦族滅亡年の推定

森 章司

[1] 釈迦族は釈尊の晩年にコーサラ国のヴィドゥーダバ王 (Viḍḍabha, Virūḍhaka) によって滅ぼされたとされる。しかしそのような事実があったのかどうか、もしあったとすればそれが釈迦族の血を引く者が残らないほどのものであったのかなど、はっきりしないところも多い。これは「釈尊の生涯」を書く上でその筋書きが変ってしまいかねないほど大きな事柄であるから、ぜひとも解決しておかなければならない問題である。

本稿では釈迦族滅亡伝承について調査し、もしあったとするならばそれは何年のことであったのかを考察する。

なおヴィドゥーダバは漢訳（本稿で扱っている文献のみ）では次のように音写されている。

毘流離（『増一阿含』）

琉璃（『四分律』『五分律』『出曜経』『法句譬喻经』『仏説琉璃王経』）

流離（『増一阿含』『十誦律』『僧祇律』『出曜経』）

悪生（『根本有部律』）

維楼勒（『義足経』）

維楼黎（『仏説琉璃王経』）

毘楼勒（『興起行経』）

随楼勒（『仏五百弟子自説本起経』）

毘盧呾迦（『大唐西域記』）

[2] 釈迦族滅亡の伝承については、村上真完氏が「初期の仏教における不殺生と平和の思考」⁽¹⁾なる論文に資料を詳しく紹介し、分析されている。しかしこれは題名からも分るとおり、釈迦族虐殺を伝える文献から平和観や宿業観を考察したものであって、本稿とはおのずから視点が異なるから、ここに用いられている文献を参照させていただきながら、初心に立ち返ってこれら文献の記すところを細かく調査することから始める。

なおこの伝承はもっともくわしいものは、以下のようなエピソードから構成されている。

① コーサラ波斯匿王の釈迦族の貴族の娘をさし出せとの要求にマハーナーマが下婢に生ませた娘をさしだし、波斯匿王とこの娘の間にヴィドゥーダバが生まれる。（波斯匿王は釈迦族が自分に反抗しないように人質のようなものを要求したのかも知れない）

② ヴィドゥーダバが釈迦国に弓術を学びに行っている時、真っ先に仏に入ってもらったかった新しく建てた講堂にヴィドゥーダバが入り込んだため、釈迦族の人々は「下婢の息子」と蔑み、追い出す。ヴィドゥーダバはこれを怨み、王になった時復讐することを誓う。（その坐ったところを洗い浄めたというから、カースト上から不浄なる者と考えられていたのであろう）

③ ヴィドゥーダバが王となる。

- ④ ヴィドゥーダバは釈迦族を討伐せんと進軍するが、釈尊が道端の枯樹に坐り王を止める。
- ⑤ 目連が神通力で釈迦族を守ろうとするが、釈尊は宿業は変えられないと退けられる。
- ⑥ 釈迦族はヴィドゥーダバ軍に弓を射かける。しかし戒を守って殺傷しない。
- ⑦ 城外にいた釈迦族の1人がヴィドゥーダバ軍と戦う。
- ⑧ 釈迦族の人々は城門を開けるか否かについて籌を行い、魔にたぶらかされて開門することに決する。
- ⑨ 入城したヴィドゥーダバ王は釈迦族を虐殺する。
- ⑩ マハーナーマが池に入水し、人々を逃そうとする。
- ⑪ その後の釈迦族の状況。
- ⑫ 釈尊に頭痛が起る。
- ⑬ 帰城したヴィドゥーダバ王は祇陀太子を殺す。
- ⑭ ヴィドゥーダバ王の末路。
- ⑮ 釈迦族虐殺の過去の因縁譚。

以下に各文献がいうところを紹介するが、後の考察に便なるように上記各項に該当する部分の冒頭にその数字を記しておく。

(1) 『日本仏教学会年報』第61号「仏教における和平」平成8年5月

[2-1] A文献は次のようにいう。

『増一阿含』034-002(大正02 p.690上)：あるとき釈尊は波羅奈の仙人住処の鹿野苑に居られた。如来が成道して間もなくのことであったが、①そのとき**波斯匿**は新たに王位を紹ぎ、釈迦族の女を娶ろうとした。釈種らはそれが力づくであったのを怒って、**摩訶男**の婢であったが美しい女を自分の娘として送った。やがてその女は男児を産み、その子は**流離**と名づけられた。

② 毘流離が8歳になった時、王は彼を弓術を学ばせるために迦毘羅衛城に留学させた。そのとき迦毘羅衛城中に講堂が建設され、人々は最初に如来に入ってもらいたいと考えた。ところが毘流離太子が獅子座に上ってしまったため、釈種たちは「婢子のくせに入って坐す」と罵り、放り出した。毘流離はこれを怨み、**好苦**なる梵志に「もし自分が王位を紹ぐ時にはこれを思い出させよ」と命じた。

③ 波斯匿王は寿にしたがって命終し、毘流離太子が王となった。④ 好苦が先の怨みを思い出させたので、王はすぐさま四部の兵を集めて迦毘羅衛に到った。これを知った釈尊は行って流離王を迎え、一枯樹の根元に坐された。それを見た王は「どうしてそのような枯樹の根元に坐されているのですか」と尋ねた。釈尊は「親族の蔭のゆえに、外人に勝る」と答えられた。王は兵を本国に還した。これがもう一度繰り返された。

⑤ 3度目に毘流離王は四種の兵を集めて舎衛城を出て迦毘羅衛城に至った。そのとき**大目乾連**は兵を他方世界に放擲すること、迦毘羅衛を虚空に移すこと、城を鉄籠をもって覆うことを提案したが、釈尊は宿縁は如何ともすることができないと認められなかった。

⑥ 釈種らは流離王の軍から1由旬離れたところから人を傷つけることがないように

矢を放った。王は怖れて逃げ帰ろうとしたが、好苦が「釈種は戒をたもっているので人を害することはない」と力づけたので、進軍して城門のところまで迫り、「城門を開けよ、そうしないと皆殺しにするぞ」と脅した。

⑦そのとき歳 15 になる**奢摩**という小児が戦って多くの敵兵を殺した。釈種らはこれ呼んで非難したので、彼は国を出て去った。

⑧釈種は魔波旬の奸計にのり開城した。

⑨流離王は城中の人々の足を地中に埋め、暴象に踏み殺させ、兵らに好き容貌の釈女 500 人を選ばせた。

⑩そのとき摩訶男は「自分が水底にいる間は釈種を逃がしてほしい」と願い出た。王は許したが、城中の釈種は東門より出た者は南門より入り、南門より出た者は北門より入るなどして逃亡できなかった。

⑪このとき流離王は 9,990 万人を殺し、迦毘羅衛城を焼いた。また王は 500 人の釈女を犯そうとしたが、女たちは「なんぞ婢生の種と情通せんや」と拒否したので、王は女たちの手足を截り、穴に埋めて、舎衛城に還った。

⑬そのとき**祇陀太子**は妓女とともに相娯楽していた。王が「自分が釈種と戦っていたのを知らないのか」となじった。祇陀太子は「知っていたが、衆生の命を害するのに堪任できなかった」と答えた。王は怒って祇陀太子を斬り殺した。

⑪500 の釈女は「仏は私たちの苦悩を憶せられないのか」と歎いた。釈尊はこれを天耳をもって聞いて迦毘羅衛城に向かわれた。そして縁起・施論・戒論・生天の論・四諦を説かれたので女たちは法眼浄を得て命終して天上に生まれた。釈尊は比丘らに、「この尼拘留園は昔は広く法を説いたが、今は空虚にして人民がいない。今より以後は再びここには来ないであろう」と説かれ、舎衛城の祇樹給孤独園に行かれた。

⑭そのとき世尊は「流離王とその兵衆は 7 日の後にことごとく摩滅するであろう」と記された。7 日目に王と兵衆は阿脂羅河に姦女を伴って娯楽していたが、にわかにか雲が起り、暴風雨となってことごとく水に流され、阿鼻地獄に墮ちた。

⑮その時釈尊は比丘らに釈子が流離王に害された因縁を語られた。昔、羅閱城中に漁師村があり飢饉であった。池の中には 2 種の魚があり、1 を拘躑といい、2 を両舌と叫んだ。彼らは過失がないにもかかわらず自分を食ったと、この衆人に怨みを持った。

⑫この村に小児があつて魚を捉えず、命を害することもなかつたが、魚が岸の上にあつて命終するのを歡喜した。その時の人民は釈種であり、拘躑魚は流離王、両舌魚は好苦梵志、小児は自分であり、坐してこれを見、笑つたので今頭痛を患うのであると説かれた。

Apadāna (p.299) : ⑫むかしわたしは漁師の村に生まれ、殺された魚を見て喜んだ。その業によってヴィドゥーダバの虐殺で釈迦族すべてが殺されたとき、私に頭痛があつた。

『四分律』「衣毘度」(大正 22 p.860 中) : ⑫そのとき迦毘羅衛の釈迦族が新たに堂舎を造つた。ところが沙門や婆羅門らが坐さないうちに、**琉璃太子**が最初に坐したので、釈迦族の人々が「未だ釈尊が坐されていないのに、下賤の婢子が先に坐した」と

蔑んだ。これを不信樂のバラモンが王に告げ口した。王は「今は力がない。もし父が死亡して自分が王となる時これを自分に語れ」と命じた。

③後に波斯匿王が王位を失い、琉璃太子が自ら王となったとき、その大臣がこれを思い出させたので、④王は四種の兵を集めて舎衛城を出て舎夷国に行った。このとき釈尊は悪樹の下に坐して、王に「親里の蔭に在って楽しむ」と告げられ、王を舎衛国に撤退させた。⑥3度目には、王は迦維羅衛城から70里離れたところに陣をしいた。そのとき迦毘羅衛の釈種は矢を打ちかけたが、五戒を守っていて肉を射るということはなかったので王は進軍した。⑧仏は門を開かなければ大丈夫だと説かれたが場内の人々は和合せず、籌を行って城を与えるという意見が多数を得た。⑨王は迦毘羅衛に入って人々を殺して穴に埋め、大象にその上を踏ませた。

⑩このとき王の外祖父である摩呵男が釈迦族の人々に「昔日の所業を今受けるべし」と告げ、王には「私が入水している間は、釈迦族の人々を解放して、殺さないで欲しい」と願い出ると、王はこれを受け入れた。そこで彼は水に入って髪を樹根に縛った。あまりに時間が長かったので、王が大臣らに確かめさせると、彼はすでに死んでいた。⑪王は彼を水から出させ、彼の身命を惜しまない行為に慈心を生じて、釈迦族の人々を解放した。かの人々は裸同然の状態で僧伽藍にやって来たが、比丘らは釈尊が「白衣に衣を与えてはならない」と制戒されていると考えて、敢て衣を与えず、釈尊に告げた。釈尊は「衣を貸し与えよ。私と会見するために」と許可された。

『五分律』「衣法」（大正22 p.140下）：①舎夷国は旧典を遵じて一切異姓と婚姻しなかった。波斯匿王は兵強を恃んで、釈迦族の娘との結婚を求めたのに対し、釈種と偽って一好婢をあてがった。そして琉璃が生まれた。

②琉璃が八歳になったとき王は、釈種が弓に巧みであったので釈摩南について射を学ぶために遊学させた。その時諸釈は新たに大堂を造ったところで、仏及び諸弟子に供養した後、中に入るつもりであったが、琉璃は眷族とともに忽ちに入って遊戯した。釈迦族はこれを見て「下賤の婢子」と蔑んだ。琉璃太子は大いに忿恨して、1人の大臣の子弟に自分が王になったときこれを思い出させよと命じた。

③王子は射法を学んで舎衛城に帰り、少年のうちに（あまり年数が経たないうちに、の意であろう）王位を継いだ。④そこで先の大臣の子弟が昔のことを告げたので、王は釈迦族を討たんとしたが、世尊が舎夷樹下に座して王を待ち、「親族の蔭は楽しい」と言って、これを思いとどまらせた。しかし三度目には、世尊は宿対は避けられないと出ることがなかった。

⑥釈種は遠くから矢を撃ちかけたが、釈種が五戒を守り、肉は傷つけないと知ると王は城を攻めた。⑤目連が鉄籠を化作して城を覆おうとしたが、世尊は業の報いは避けられないと許されなかった。⑧釈種は城門を開けるかどうかで協議して籌を行ったが、摩波旬にたぶらかされて城を明け渡すことを決めた。⑨しかし王は釈種を皆殺しにしようとした。⑩そこで釈摩南は琉璃王の外家公（外祖父）であることをもって入水する間の猶予を願い、釈種を助けようとした。⑪これに感じいった王は釈種を許した。

⑭琉璃王は仏の7日後に罪を受けるであろうとの予言を聞いて、眷族と共に船に乗

り阿夷河に入ったが、七日して水が膨張して船が転覆して一時に死尽した。

⑩世尊は釈迦族の人々に衣を与え、貸すことを許された。

『十誦律』 「受具足戒法」 (大正 23 p.151 中) : 釈尊は迦毘羅衛国に居られた。⑨このとき**琉璃**が迦毘羅衛の釈迦族を殺害した。⑩ときに**阿難**のもとに2人の親里の子が逃れて来たので、彼は2人を残食で養畜した。これを知った釈尊は阿難に「どうして子どもを出家させないのか」と尋ねられた。そこで彼が「仏は15歳に満たない者を沙弥にしてはならないと定められました」と答えると、釈尊は「今より、馭鳥する者を沙弥としてもよい。最下は7歳とする」と定められた。

『僧祇律』 「(比丘尼) 僧残 006」 (大正 22 p.519 上) : ⑨**流離王**が迦毘羅衛国を伐したとき、比丘尼らが城外で独り宿泊した。そこで釈尊は「独りで宿泊することを、王難を除いて許さず」と制戒された。(比丘尼・僧残法第6「離衆宿戒」因縁)

『根本有部律』 「雑事」 (大正 24 p.234 上) : 釈尊は迦毘羅衛城の多根樹園に居られた。

⑪釈迦族の**大名**(摩呵男)の荘園の一つの知事人の娘として生まれた**明月**が、摩呵男のために美しい華鬘を作ったので、**勝鬘**とよばれるようになった。

勝光王(波斯匿王)が劫比羅国の大名の園に迷い込み、勝鬘が手厚く世話したので王の夫人の1人として迎えられた。他の夫人は**行雨**といい、二人は仲が良かった。

勝鬘夫人は男児を産み**悪生**(毘瑠璃)と名づけられた。この子の生まれる前に国大夫人が勝鬘を見て、必ず我が憍薩羅城を滅ぼすと予言したからである。と同時に大臣婆羅門婦も男児を産み**苦母**と名づけられた。

⑫悪生太子は苦母等と獵に出て、劫比羅城の釈迦園に迷い込んだ。人々は太子が攻めてきたと勘違いして戦おうとしたが、1人の老人がなだめるあいだに悪生はスパイのために1人を残して国に帰った。このスパイは、釈子が「婢子は今どこにいるのか。もし捕えたなら手足を截り、心臓をえぐるのに」などと話し、悪生が行住した土地を掘り起して新たな土を入れ、浄めていたことを報告したので、悪生は怒り、父王が死んで自分が位を紹いだ時には釈種を誅せんことを誓った。

⑬後に悪生太子は逆害心を起して、大臣等と計って王位を奪おうとしたが、**長行**という1人の大臣だけは、「父王は年老いて久しからざる間に崩ぜられる。その時に王位を受ければよい」となだめた。

後のとき勝光王は長行大臣だけを連れて遊園に出、世尊が吉祥聚落釈種住処(Metalūpa)におられることを知って会いに行った。そして「私は憍薩羅王、仏もまた憍薩羅に住される、私は刹帝利種、仏もまた刹帝利種、私は寿八十をすぎ、仏もまた寿八十をすぎ」などと会話した。長行は悪生太子の悪巧みをどのように回避したらよいのかを考えて、その間に国に還って、諸臣と諮って悪生を王となし、勝鬘・行雨の二夫人を老王のもとに向かわせた。釈尊と別れた勝光王は途中で二夫人に会い、勝鬘には子の王の俸料を受けよと命じて城に帰らせ、自分は行雨とともに王舎城に行って**未生怨王**に会おうとした。未生怨王は「勝光王を王となし、自分は太子となろう」と考えたが、勝光王は空腹のために大根を食べて死んだ。そこで未生怨は丁重に葬儀を営んだ。

⑭悪生王は釈子を誅伐せんという誓いを忘れず、王位を紹ぐと四兵を発して劫比羅

国を討とうとした。これを知った世尊は兩國界の太路の傍らの枝葉のない小樹の下に坐した。これを見た悪生王は「なぜそのようなところに坐されているのか」と問うと、世尊は「親族の蔭は涼しい。樹なんぞ顧みるに足らん」と答えられた。世尊は劫比羅城の釈迦族のことを愍念されているのだと考えて、王は兵を還した。そしてこのようなことが再三に及んだ。

⑤しかし悪生王は釈子が自分を「婢兒」と呼んだ恨みを忘れることができなかった。苦母も「沙門喬答摩は離欲しているのだから、眷族の愛などはない」と焚きつけたので王は出兵した。そのとき世尊は劫比羅国の多根樹園に住されており、これを知った大目連が「神通力で兵衆を遠くに擲ちましようか、城を変じて鉄となし、その上を鉄の網で覆いましょうか」と提案した。しかし世尊は釈迦族は前生の業果を受けるべきだと許されなかった。

⑥劫比羅城の釈子らは見諦しているがゆえに、戦ったけれども敵軍を傷つけるということはなく、「悪生およびその兵衆を傷害してはならない。もし犯せば釈種にあらず」という制令を作った。⑦しかし郊外に住んでいた閃婆という1人の釈種は、見諦しないがゆえに戦って大いに戦果を挙げた。

⑧悪生は釈子が勇健であるため撤退しようとしたが、苦母が「巧方便を用いれば破滅できます」と説得し、「われわれに悪意はない、小事あって城に入ろうとするだけで、用が済めば帰還する」とのメッセージを送った。城内では籌を行い、悪魔王にもたぶらかされて、開門して兵を入れることになった。⑨しかし城に入った悪生王は四兵を放ち、釈子を誅殺せよと命じた。⑩これを見た大名は「自分が池に入っている間だけは眷族を放て」と願い出、王はそれを許可した。大名は水底で髪を樹根に結び、しばらくのあいだ出てこなかった。⑪この間に過去時に善根を行じた者はあるいは末羅国に行き、あるいは泥波羅に、あるいはその余の聚落城邑に行った。しかしそうでない者は東門から出て南門に入り、南門から出て西門から入るなどして出られなかった。王はこれら残りの釈種を枉殺し、その数7万7千に及んだ。そして王は500人の童男を率いて外道の園に行つて穴を掘つて埋め、首を出させて鉄？をもって碎かせた。

⑫王が釈種を殺す時釈尊に頭痛があった。世尊はその因縁を、むかし1河辺に500人の漁師があり、その中に1人の童子があつて、彼らが2尾の大魚を捕得した時に歡喜心を生じた。この2魚は悪生と苦母であり、500の漁民とは500の釈子であり、その中の1童子とは自分であつて、そのために自分は無常菩提を証得したとはいえ、この頭痛を受けたのであると語られた。

⑬釈子を殺した悪生王は室羅伐城に帰還した時、逝多太子が高楼上で女たちと五欲の楽しみを楽しんでいるのを見て、「自分は怨家を討つて疲れ果てているのに、どうして欲楽を受けているのか」となじった。太子は「もし釈子が怨家なら誰が善友であるか」と反問した。王は怒つて逝多太子を殺した。⑭また諸臣は劫比羅城から引連れてきた500人の童女を波吒羅池のそばでその手足を截つた。そこでその地は截手足地と呼ばれるようになった。

⑮仏は悪生と苦母の悪業を、「橋薩羅国は破滅し、7日後に悪生と苦母は猛火のた

めに焼かれ、無間地獄に墮ちる」と記された。二人はこれを逃れようと、園中の池の中に柱楼を作ってその中に住したが7日目に忽然と火がおこり、焼かれ死んで無間地獄に墮ちた。

⑩悪生王が釈迦族を誅したとき城中に多くの瓔珞・鑲釧の装身具があった。釈迦族の女性たちは悲しみ、悲しい記憶を思い出させる瓔珞・鑲釧の装身具を僧伽に布施した。ところがこれを得た六群比丘が身に飾って迦毘羅衛城に入って乞食をしたので、それを見た釈迦族の女性が「我らに悲しい思いを起させるとは」と泣いて訴えた。これを知った比丘らが釈尊に告げた。釈尊は「嚴飾雜彩の具を着けてはならない。着ければ越法罪」と定められた。

『根本有部律』 「(比丘尼) 波逸提 108」 「知曾嫁女人年未滿十二与他出家学処」 (大正 23 p.1004 中) : 世尊は室羅伐城におられた。⑨そのとき悪生王(琉璃王)が釈迦族を誅伐したので、⑩多数の未亡人が出て出家をした。やがて彼女らが具足戒を受けようすると、比丘尼らが「満20歳になるのを待て」と言った。すると彼女らが「それまで待てない。私たちは夫によく仕えたので、師に仕えることができる」と応じた。かくして比丘尼が比丘に告げ、比丘が釈尊に報告した。そこで釈尊は「二年正学法を修した後の満12歳の曾嫁女、あるいは満18歳の童女に、近円(具足戒)を授けてもよい」と制戒し、そのやり方を制定された。

[2-2] これを伝えるB文献には次のようなものがある。

Dhammapada-A. (vol. I p.344) : ①波斯匿王は比丘たちが他のところではするのに、王宮では食事をしない理由を釈尊に尋ねた。釈尊は「比丘たちは親族とか釈迦族の者に親愛感を持っているからです」と答えた。波斯匿王はそれでは釈迦族の娘を王妃にしようと考えて、カピラヴァットゥ城に使いを遣って娘をほしいと伝えさせた。カピラヴァットゥの釈迦族たちは、「われわれはコーサラ王の命令の行われるところに住んでおり、与えないと復讐があるであろう。しかし与えればわれわれの族統が減びる。どうしたらよかろう」と相談した。そしてマハーナーマがナーガムンダーという下婢に生ませたヴァーサバカッティヤー(行雨 Vāsabhakhattiyā) という16歳になる娘を与えることになった。波斯匿王は喜んで第1王妃とした。彼女はまもなく王子を生み、王子はヴィドゥーダバ(Viḍūḍabha)と名づけられた。

②彼が16歳になった時、祖父に会うためにカピラヴァットゥに行った。そしてその帰りに1人の兵士が偶然に、公会堂で彼が坐った座を「これがナーガムンダー下婢の俸の坐った座だ」と譏りながら、その座を牛乳と水で洗い清めているのを見て、それを王子に知らせた。王子は怒って、「自分が王位についた時には、やつらのどの笛の血をとって、その座を浄めてやる」と誓った。このことを知った波斯匿王は、王子とその母親を奴隷の地位に低めてしまった。しかし釈尊の「母の姓よりも父の姓こそが標準である」との教えにより、母と子をもとの地位に戻した。

(バンドゥラ Bandhula という王の将軍とその妻マッリカー Mallikā の話が挿入されているが省略する)

③波斯匿王はバンドゥラ将軍の甥であるディーガカーラーヤナ(長作 Dīghakārāyaṇa) を将軍にした。しかし彼は叔父が王に殺されたことを恨みに思って

いた。あるとき釈尊は釈迦族の国であるウルンパの町に住されていた。王は釈尊に会うためにそこに行って、王の5つの標識をカーラーヤナに託して、1人で釈尊に会った。すべてはMN.089 *Dhammacetiya-s.*（「法荘嚴經」）に書かれているとおりである。王が釈尊に会っている間にカーラーヤナは王の標識を持って帰ってヴィドゥーダバを王とした。それを知った王は、甥の阿闍世王の力を借りてヴィドゥーダバをひっそらえようと、1人の侍女を連れて王舎城に行ったが、城門の外で死んでしまった。阿闍世王は叔父のために盛大に葬儀を行った。

④王位を得たヴィドゥーダバは復讐心に燃えて、釈迦族の者を皆殺しするために兵を起した。それを知った釈尊は空中を駆けてカピラヴァットゥ城の近郊で葉影のない1本の樹下に坐った。それを見たヴィドゥーダバが「なぜ葉影の濃い大きなニグローダ樹の下に坐られないのですか」と問うと、「親族の葉影は涼しいのです」と答えられた。王は兵を舎衛城に戻した。このようなことが3度まで繰り返されたが、4度目には釈迦族の河の中に毒を投じた業は変えられないと知られて、出かけられなかった。

⑥ヴィドゥーダバは釈迦族を虐殺しようと進軍した。釈迦族たちは得意の弓の技術を見せつけて敵の戦意をくじこうとして矢を撃ちかけた。しかし命を断つことはなかった。ヴィドゥーダバは怖気づいたが、しかし1人も傷ついていないことを知らされると、⑩さらに軍を進めて、「私は釈迦族だという者のすべてを殺せ、しかしマハーナーマに従う者は助けよ」と命じた。釈迦族たちは嘘をいうよりは死んだ方がましだと考えて、ある者は菌に草の葉をはさみ、他の者は葦をもって、「お前は釈迦族(Sākiya)かそうでないか」と問われた時、「野菜(sāka)ではない、草(tiṇa)だ」とか、「野菜ではない、葦(naḷa)だ」と答えた。またマハーナーマに従う者たちは助命された。菌に草の葉をはさんだ者たちは草釈迦族(Tinasākiyā)、葦をもった者たちは葦釈迦族(Nalasākiyā)として知られるようになった。⑨ヴィドゥーダバは残りの者のすべてを赤子でさえ殺害して、のど笛の血で座を洗った。

⑩ヴィドゥーダバはマハーナーマを捕えて帰還した。ヴィドゥーダバは祖父と一緒に食事をしようとマハーナーマを呼んだが、クシャトリアは奴隷の息子と食事をしたくないと、池に飛び込んで死んだ。⑭その夜ヴィドゥーダバはアチラヴァティー河でキャンプをしたが、にわか嵐が来て、ヴィドゥーダバと兵士たちは河に流され、魚や亀たちの餌食となった。

⑮釈尊はこの釈迦族たちの虐殺を、過去世において彼らが河に毒を投げ込んだ報いであると説かれた。

Jātaka-A. 007 Katṭhahāri-j. (vol.I p.133) : (仏が祇園精舎におられた時の話) ①ヴァーサバーはマハーナーマが下婢のナーガムンダーに生ませた娘でコーサラ国王の王妃であり、ヴィドゥーダバを生んだ。しかし生れが卑しいことがわかって、彼女は位を斥けられ、王子も太子の位を棄てさせられた。これを知った釈尊は王に、「彼女はマハーナーマという王の娘で、王(波斯匿王)によって王子を設けた。その王子がなぜ王国の主権者にならないのか」と説き、前世では王が薪取り女の胎にできた王子に王国を譲った本生話を話された。

Jātaka-A. 465 Bhaddasāla-j. (vol.IV p.144) : (仏が祇園精舎におられた時の話) (釈

尊が3度まで葉影のない樹下に坐ってヴィドゥーダバの釈迦族侵攻を思いとどまらせたが、4度目はしなかったところまでは *Dhammapada-A*.と全同であるから省略する。番号でいえば①②③④を含む。) ⑨そこでヴィドゥーダバは釈迦族の者全部を殺し、彼らののどの血をもって座を洗い浄めて舎衛城に還った。

『出曜経』(大正04 p.624中) : ⑥迦惟羅越国の釈種は弓術に自信があったので、**流離王**が攻めてきた時に矢を撃ちかけた。しかし殺傷することはなかった。流離王は撤退しようとするが、損害がないことを知ると、さらに前進した。⑧これを釈尊に知らせ教えを請うと、「門を開けば傷損せられ、開かなければ傷損せられることはない」ということであった。そこで流離王は「速やかに門を開け、和睦して互いに傷損することがないようにしよう」と申し送った。釈種は会議したが決定しなかった。⑦その間に**舎馬釈種**が城外にあって闘い、流離王の兵士7万を殺して入城した。しかし釈種たちは釈種の名を汚したとして追放した。

⑩そこで流離王がなおも攻め込もうとしたので、**摩訶男釈**が流離王に「水に入っている間は釈種を逃してくれ」と願い出て許された。諸釈はその間にみな逃走することができた。摩訶男が水に入って髪を樹根に結んで水死していることを知った流離王は、⑪7万の釈種の須陀洹果を得た者たちを地に埋め象に踏み殺させた。世尊は毘舍離の童子らに「宿業の因縁は逃れられない」と説かれた。

『出曜経』(大正04 p.669中) : ③仏は釈迦瘦迦惟羅越国尼鳩類園中におられた。そのとき**流離**が父王を位より退け、自ら立って王となった。④その王に悪臣の**耶舎**という者があり、昔舎夷国の精舎において辱められたことを語って復讐を唆した。そこで王は四種の兵を集めた。これを知られた仏は道側の枯樹の下に坐された。流離が舎夷国を伐せんとする途中でこれを見、「なぜ枯樹の下に坐されているのですか」と尋ねた。仏は「五親の蔭は厚いのです」と答えられた。流離は如来が五親のために助けようとされているなら、神力を攻伐することはできないと兵を戻した。しかし二度目には如来は宿縁の避けるべからざることを知って僧中に還られた。⑤**大目連**が舎夷国を挙げて虚空中、大海中、須弥山裏、地下の他方世界に著けることを提案したが仏は許されず、宿対の避けるべからざることを説かれた。

『出曜経』(大正04 p.746下) : 昔、⑨**瑠璃王**は迦惟羅竭国を攻伐して人民を摧破し、7千を生け捕りにし、聖果を得た者についてはその足を地に埋め象に踏み殺させた。⑭これを知って仏は、「彼らは7日にして報を受け、無間地獄の火に焼かれ、コーサラ国の王種は絶える」と記された。瑠璃はガンガー河に行き船に乗ってこれを免れようとしたが無駄であった。⑮これに先立つことであるが、瑠璃が帰城した時**祇頭太子**が音楽を楽しんでいるので、自分が賊と戦い万国を憂えているのにとして、利剣を抜いて斬って捨てた。

『義足経』「維楼勒王経」(大正04 p.188上) : 仏は舎衛国祇樹給孤独園におられた。②そのとき迦維羅衛の諸釈は新たに大殿を建て、仏に真っ先に使ってもらおうと考えていた。しかるに舎衛国の王子である**維楼勒**がやってきて、その中に宿してから還ってしまった。釈種たちはなぜ婢子が先に入ったのかと怒って、殿中の土を掘り起して新しい土を入れ牛乳で洗った。維楼勒はこれを知って自分が後に国政を把った時には

復讐すると誓った。

③久しからずして舎衛国王が崩じ、大臣は協議して太子を王とした。④王はすぐさま四種兵を起して迦維羅衛城を攻めようとした。その時**仏は舎衛城に乞食に入り、食終って道の傍らの枝葉の少ない釈樹という木の下に坐した**。王が進軍の途中にこれを見て、「どうして薄蔭樹の下におられるのですか」と尋ねた。仏は「その名を愛してその涼を楽しんでいるのです」と答えられた。王は諸釈を助けるお気持ちなのだと言き返した。仏は迦維羅衛へ行かれた。

しばらくして舎衛国王は再び兵を起し、迦維羅衛城から40里離れたところに宿営した。釈種は仏のところを使いを遣り、どうしたらよかろうかと相談した。仏は「堅く門を閉ざして入れないようにしなさい」と答えた。⑤**摩訶目犍連**は釈国を異天地の間に移し、鉄籠で覆うことを提案したが、仏は宿業は避けられないと拒否された。

⑥舎衛国王が迫るので、諸釈は弓を撃ちかけたが、敵を傷害するという事はなかった。王は怖気づいたが、大臣が諸釈は五戒を持っているので傷害はしないというので前進した。⑧そして「われわれは仇敵ではない、入城したらすぐに出城する」と申し入れた。城内では開門するかどうかで籌を行ったが、開門を主張する者が多数を占めた。⑨維樓勒王は入城すると諸釈を捉えて城外でこれを殺した。

⑩**釈摩男**は池の中に没している間は諸釈が城を出ることを許してほしいと願って許され、池の中に入って樹根に髪を結んで水死した。⑪王はこれを知って城中の諸釈を捕らえ、悉く象に踏み殺させた。⑬釈尊は逝心須加利講堂に行かれ、屠者や漁獵者、屠牛者などはその業によって楽を得ないことを説き、⑭7日後に維樓勒王は水のために漂わされることを予言された。

『法句譬喻経』(大正04 p.583上)：昔**長者須達**は**祇陀太子**の園田を買って精舎を作り世尊に奏上した。祇陀はそののち東宮において仏の教えを喜ぶようになった。③祇陀の弟の**瑠璃**は常に王(**波斯匿**)のそばにいたが、あるとき佞臣の**阿薩陀**らが謀って瑠璃に大王の印綬を着けさせ、御座の上に坐させて「大王のごときだ」と拝賀し、兄を位につけてはならないと唆した。そこで瑠璃は祇園精舎にいる大王を襲ったので、王は舎夷国に逃げたが途中で死んだ。⑬ここにおいて瑠璃は専制し、兄の祇陀も殺した。⑨そしてこの時、瑠璃王は舎夷国も伐ち、**釈種の道跡の人を殺害した**。⑭仏は瑠璃は7日後に地獄の火に焼かれるであろうと記した。王は恐れて船に乗って河に出たが、水中から火が出て焼け死んだ。

『法句譬喻経』(大正04 p.590下)：昔仏は舎衛国の精舎にいまし諸々の天人に法を説かれた。③そのとき国王の第2児である**瑠璃**という者があり、歳20にして父王を退け、兄太子(**祇陀**)を伐って自ら王となった。②悪臣の**耶利**は昔王が王子であった時、舎夷国外の精舎において辱められたことに復讐すると誓ったことを思い出させ、王に出兵させた。⑤それを知った仏第2の弟子**摩訶目犍連**は釈尊に舎夷国人を虚空、大海、両鉄圍山の間、他方の大国の中におくことを提案したが、宿対の罪を離れることはできないと許されなかった。そこでひそかに4、5千人の舎夷国人を鉢の中に入れて虚空の星宿の際においた。⑨瑠璃王は3億人の舎夷国人を殺した。目連は4、5千人の舎夷国人を救ったことを世尊に報告すると、世尊は確認してみよという。行っ

て鉢の中を見るとみな死んでいた。仏は「生老病死など七事は免れることはできない」と説かれた。

『六度集経』「釈家畢罪経」（大正 03 p.30 中）：仏は舍衛国に遊行された。①外道の者らは釈尊を陥れようとして**好首**という女に誘惑させた。王（**波斯匿**）もいったんはこれを疑ったが、慚愧の心を起して仏女の妹を娶ろうとした。諸釈は喜ばず賤妾の子を送った。そしてその女は男子を産んだ。

②この子は舅に会いたいと釈国に行った。そのとき諸釈は仏の精舎を作って仏に入ってもらおうとしていた。ところが仏が未だ坐らないのにこの庶子が坐ってしまった。人々は「なんぞ婢の子が座に上るとは」と非難した。庶子は出て、その友人の**頭佉摩**に、「もし私が王となったら、汝はこの恥辱を忘れるなよ」と命じた。

③大王が崩じると兄弟が二国を立て、仁なる民は兄を奉じ、凶なる民は弟についた。④弟王は兵を起して釈迦族を攻めようとしたが、仏が道端の半分枯れた樹下に坐しているのを見て、「どうして枯樹の下に坐しておられるのですか」と尋ねた。仏は「この樹は釈といい、私はその名を愛しているからです」と答えられた。王は兵を戻した。

⑥大臣は天文を占って再び兵を起し、釈子の城から数里のところに宿営した。城からは風雨のごとく矢を撃ちかけたが、兵を傷つけることはなかった。釈人が仏に伺いを立てると、「堅く門を閉ざせ」ということであった。⑤王はさらに軍を進めたので**目連**が「天網をもって城を覆いましょう、他方の利土におきましよう」と提案したが、仏は罪は如何ともしがたいと退けられた。

⑧魔にたぶらかされて諸釈は門を開いたので、敵兵がなだれ込んだ。⑩**釈摩南大將軍**は水に入っている間だけは城中の人々が逃げるのを許してほしいと申し出、王はこれを許可した。釈摩南は樹根に髪を結びつけて水死した。⑨王はこれを知ると、兵に地を掘らせ、釈人を半ば埋めると、象に引かせた概でこれを殺した。⑫その時仏に首疾があった。⑪王は釈摩南が身を殺して人々の命を請うたのを思っていたみ悲しみ、軍を退かせた。⑭仏は「釈罪は畢った。しかし王の罪興り、7日後に王およびその臣民は火に焼かれる」と記された。王は群臣とともに船に乗って海に出たが、火に焼かれて地獄に墮ちた。⑬後に仏はこの地に行ったが、すでに死んだ者あり、肘や足を失った者もあったが、仏法僧に帰命した者もあった。

⑮仏は過去の因縁を説き、菩薩の国は漁労で暮らしていたが、自分は魚の首が破れるのを見て可としたので、仏を得たけれども首疾の殃があるのだと説かれた。

『仏説瑠璃王経』（大正 14 p.783 中）：仏は迦維羅衛の釈氏精舎に住された。500比丘と侍者阿難と金剛力士が一緒であった。②そのとき舍夷の人々は講堂を造り、真っ先に仏に堂に昇ってもらおうと考えた。しかし舍衛国の**瑠璃**（維楼黎）太子が堂に入り座に休息してしまった。人々は彼を面罵しこれを辱め、追い出し、彼が踏んだ地の土を易えてしまった。瑠璃太子はその罵言を聞き、怨みに思って「自分が王になった時には復讐する」と誓った。大臣の**阿薩陀**（晋に無信という）はこれを書状にして帯の中にしまった。

③太子の父王は**波斯匿**といい、妃を**末利**といった。二人が祇園精舎に行っている時に瑠璃太子は帰還し、父王と后が仏のところに行っていることを知ると、王の近臣

を殺してしまった。ただ王の衣冠2人が逃れて王に会った。末利は王と一緒に自分の父のところに還ろうと7日7夜歩き続け、迦維羅衛の兜薩聚に着いたが夜のことで入れず、王は空腹のため蘿蔔を食べて死んでしまった。瑠璃は父王が薨したことを知ると王となった。

④大臣は帯の中の書状を見せたので、王は迦維羅衛を伐たんがために四種の兵を起した。仏はそれを知ると、道のわきの枯樹の下に坐した。瑠璃王がどうして枯れて刺が多い樹下で坐せられるのかと問うと、「私は刺のある樹のほうが安穩なのです。親族を哀愍し、傷むからです」と答えられた。王は軍を還した。

⑤それからしばらくして釈尊の顔色が悪いので阿難が理由を聞くと、7日後に迦維羅衛の釈氏が傷つき斃れるからだと言われた。大目犍連が舎夷国を空中に置きましょうなどという提案をするが、宿世の殃罪は如何ともしがたい、と許されなかった。そしてこのようなことが3度まで繰り返されたが、4度目には仏はお出ましにならなかった。

⑥王の軍は舎夷の国界に迫った。釈子らは40里も離れたところから弓を撃ちかけたが、わざと狙いを外して敵軍を傷つけなかった。瑠璃王はいったんはひるんだが、舎夷の人民は仏戒を守っているので象馬牛畜の命に別状がないことを知ると、進軍して城門のところまで迫った。⑧城内では開門するか否かを共議して籌を行ったが、敵に通じる者があってついに開門した。⑨瑠璃王は3万人の貴姓を縛り、地に埋めて頭だけ出させ、象に踏み殺させ、犁で首を刎ねた。

⑩釈摩男がこれを見かねて、池の中に入っている間は逃がすことを約束させて入水し、髪を樹根に結びつけて死んだ。⑪王はこれを憐れみ、慈哀の心を起して3億人の命を助けた。

⑭王たちが舎衛城に還った後、仏と弟子たちは迦維羅衛に行って、人民が傷つき、手足を失って裸同然の女性たちを見て、瑠璃王は7日後に地獄の火に焼かれると記された。王は恐れて船に乗って海に出たが、自然に出た火によって焼かれた。

『興起行経』「仏説頭痛宿縁経」(大正04 p.166下)：世尊は過去世の因縁を語られた。昔羅闍祇に村があり岐越村と叫んだ。その時飢饉であったので、村人たちは多魚池で魚を食べ、4歳になる小児は岸で跳ね回る魚を見て喜んだ。池には魚と多舌という魚がおり、彼らは我らは罪もないのに食べられると怨みを持ち、後世に復讐すると誓った。村人は現在の迦毘羅衛の釈種であり、小児は自分、魚は毘樓勒王、多舌魚は王の大臣の悪舌であり、魚が跳ね回るのを見て喜んだので、地獄に墮ちて苦しみ、今仏となったけれども、毘樓勒王が釈種を伐ったとき自分に頭痛があったのである、と。

『仏五百弟子自説本起経』(大正04 p.201下)：かつて捕魚の村の漁師の子に生まれ、魚が取れると喜んだ。この罪によって地獄に墮ち、随樓勒王が釈氏を殺傷した時、頭痛があった。

『大智度論』(大正25 p.122上)：仏にもまた病気がある。釈氏が罪を畢るとき仏にもまた頭痛があった(1)。

(1) 以上のほかに Avadānakalpalatā (BST, pp.234a-244a) があるが、本稿では参照できなかった。

[2-3] C 文献には次のようなものがある。

Bigandet (vol. I p.266) : **阿闍世王** (Adzatathat) はアンガとマガダの 2 国を領していた。王の母は**韋提希**と称し、カーシ国とコーサラ国を領する**波斯匿王**の妹であった。阿闍世はカーシをめぐって波斯匿王と戦い、波斯匿王を捉えた。波斯匿王は闘いの利なきを知って和議を結び、王女の**ワヂュヘーラ・コンマー**を阿闍世に与えた。**③**この後 3 年にして、波斯匿王は**メーッタドゥッパ** (Meittadoubha) のために王位を奪われた。メーッタドゥッパは王の妾の子である。波斯匿王は阿闍世王に頼ろうとしてマガダに行ったが、その途中で死んだ。**⑨**野心の多い阿闍世王のためにコーサラ (Kosala) およびカピラヴァットウ (Kapilawot) の釈迦城が全滅させられたのはブッダ成道後 44 年、メーッタドゥッパ王の治世の時であった。ブッダは第 44 の雨期を祇園精舎 (Dzetawon) で過ごされた。

『大唐西域記』 (『中国古典文学大系』 22 p.196) : (劫比羅伐率屠堵国) **⑨**大城の西北に数百千の率堵波がある。釈種の人たちが誅殺されたところである。**毘盧釈迦王**は釈氏の一族の 9,990 万人を捕え、皆殺しにした。**⑦**誅釈の率堵波の西南に 4 つの小さな率堵波があり、4 人の釈種が軍勢を防いだところである。**①**初め勝軍王 (波斯匿王) が即位して結婚を釈種に求めたが、釈種の人には王が同類の人でないのを卑しめ、偽って使用人の女を嫁入りさせた。この女の産んだ子が毘盧釈迦である。**②**毘盧釈迦は釈氏に留学し、新しい講堂に休んだが追い出されて、下婢の産んだ子だと辱められた。毘盧釈迦は即位して軍隊を起してここまで来たが、4 人が戦って侵入軍を退散させた。しかし狂暴な行いをしたと非難されて追放された。追放された 4 人は北方の雪山のほうに行き、1 人はウディヤーナ、1 人はパーミヤーン、1 人はヒーマタラ、1 人は商弥国の王となり、血統は絶えることがない。

[2-4] 釈迦族の滅亡が記されている文献は以上である。本稿はこの伝承の研究を直接の主題とするのではないから、1 つ 1 つの内容を検討することはしないが、どの文献にはどのような項目が取り上げられているかは、伝承系列の検証に役立つであろうから、これを表にして掲げておく。ただし同じ項目でも内容が異なる場合があるので注意されたい。例えば波斯匿王が釈迦国に娘を要求した理由とか、ヴィドゥーダバが釈迦国に怨みを持つようになった理由などである。しかしヴィドゥーダバがどのようにして王位に上ったのか、ヴィドゥーダバとの武力衝突の結果、釈迦国がどうなったかについては、釈尊の伝記に係ることであるので、その内容を次項以降において検討する。

なおすべての文献に共通する伝承は、ヴィドゥーダバと釈迦国の間に何らかの武力衝突があったことと、それが釈尊の存命中であったことである。もっとも『西域記』だけは釈尊が存命中であったかどうか明らかでないが、これに特別の注意を払うことは必要としない。また *Bigandet* は釈迦族の滅亡は阿闍世王によるとするが、これは伝承の違いというよりは、何らかの間違いであろう。

ただしこれを伝える文献についていえば、A 文献においては経蔵には“*Apadāna*”と『増一阿含』にあるのみで、パーリの 4 ニカーヤにも漢訳の『長阿含』、『中阿含』、『雑阿含』、『別訳雑阿含』にもこれを伝える文献がない。しかも“*Apadāna*”はごく簡単な頭痛があったという記述であって、これは『増一阿含』や『根本有部律』「雑事」の下線を施した部分

を下敷きにしていることは明らかである。『増一阿含』や『根本有部律』の成立は遅く、頭痛伝承も後世のものであろうことは推測するに難くない。

しかし律蔵には『パーリ律』には見いだされないが、『四分律』『五分律』『根本有部律』には詳しく記され、『十誦律』『僧祇律』にもごく簡単ではあるが、これに關説する。『四分律』『五分律』は受戒犍度において仏成道以前の仏伝を有し、この部分の伝承は後世の付加と考えられるから、今の毘瑠璃王に依る釈迦族虐殺の伝承も遅くに成立したものとも考えられる。『根本有部律』については今更いうまでもないであろう。

なお仏伝經典の中に、釈迦族滅亡の記事を含むものはない。多くの仏伝は釈尊の釈迦国への帰郷くらいまでしか記さないから当然であるとしても、釈尊の入滅まで記述する例えば“*Buddhacarita*”（『仏所行讚』）や『仏本行經』『僧伽羅刹所集經』にも記されないのは奇妙である。

このように、釈迦族滅亡伝承を記す文献については何か割り切れないものを感じるが、ごく簡単であるとはいえ『十誦律』『僧祇律』にも記されているから、後の成立にかかる“*Apadāna*”以外のパーリ聖典に何の記述もないのは不思議であるが、釈尊の最晩年に釈迦国とコーサラ国との間に何らかの武力衝突があったのは事実として認めなければならないであろう。

なお祇園精舎の地所のもとの所有者であったジェータ太子を、『法句譬喩經』はヴィドゥーダバの兄であったとすることも注意しておいてよいであろう。

文献名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
増一阿含	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>Apadāna</i>												○			
四分律		○	○	○		○		○	○	○	○				
五分律	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○			○	
十誦律									○		○				
僧祇律									○						
雜事	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
波逸提 108									○		○				
<i>Dhp.-A.</i>	○	○	○	○		○			○	○	○			○	○
<i>Jāt.-A.007</i>	○														
<i>Jāt.-A.465</i>	○	○	○	○					○						
出曜經 (1)						○	○	○			○				
出曜經 (2)			○	○	○										
出曜經 (3)									○				○	○	
義足經		○	○	○	○	○		○	○	○	○			○	○
法句譬喩 (1)			○						○				○	○	

法句譬喩(2)		○	○		○				○					
六度集経	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○
瑠璃王経		○	○	○	○	○		○	○	○	○			○
興起行経												○		
自説本起経												○		
大智度論												○		
ピガンデー			○						○					
大唐西域記	○	○					○		○					

[3] 以上のように釈迦族は、コーサラ国の国王が波斯匿からヴィドゥーダバ（毘瑠璃）になった後に、コーサラ国と何らかの武力衝突があり、この時には釈尊はまだ存命されていたことにもなっている。

[3-1] それでは波斯匿からヴィドゥーダバへの王位継承はどのようになされたのであろうか。この部分を記す文献（③の欄に○がついているもの）の原文は次のようになっている。

『増一阿含』034-002（大正02 p.690上）：是の時、波斯匿王は寿に随って在世し、後に命終を取る。便ち流離太子を立てて王と為す。

『四分律』「衣毘度」（大正22 p.860中）：若し我が父亡じ、我れ王と作る時当に我に語れ。後に王波斯匿は王位を失し、瑠璃太子即ち自ら王と作る。

『五分律』「衣法」（大正22 p.140下）：瑠璃太子射法を知り已りて舍衛城に還る。少年の中に便ち王位を紹ぐ。

『出曜経』（大正04 p.669中）：父王を位より退け、自ら立ちて王となる。

『義足経』「維楼勒王経」（大正04 p.188上）：是れより久しからずして舍衛国王崩じ、大臣集議して太子を徴し拜して王と為す。

『法句譬喩経』（大正04 p.590下）：（瑠璃は）其の年二十にして官属を將い従え、其の父王を退かせ、兄太子を伐ちて自らを禅して王と為す。

『六度集経』「釈家畢罪経」（大正03 p.30中）：佞臣巧辞して遂に二嫡（2人の太子）を立てて民を分かちて正治す。大王崩ずるに、位して兩國を立て、民は悦するところに随う。

以上は、波斯匿王からヴィドゥーダバへの王位継承を簡単な文書で語るものであるが、この間を物語的に語るものがある。これは父王の留守にヴィドゥーダバの臣下が謀って、父王の知らない間に即位をさせ、父王はそれからまもなく死亡したとする。『根本有部律』「雑事」と *Dhammapada-A.*、*Jātaka-A.* 465 *Bhaddasāla-j.* は、これを *MN.089 Dhammacetiya-s.* (1)、『中阿含』213「法莊嚴経」(2) に記される波斯匿王がメーダルンバに釈尊を訪ね、「私も80歳、釈尊も80歳」などと会話した時を舞台設定とする。

これにたいして『法句譬喩経』(3) と『仏説瑠璃王経』(4) は状況はよく似ているが、これは波斯匿王が祇園精舎に釈尊を訪ねている時のこととする。なお *Bigandet* はヴィドゥー

ダバに相当する人名をメーッタドゥッパとするが、当然ながらパーリ・アッタカターの伝承を引き継いでいるものと考えられる。

ちなみに MN.089 *Dhammacetiya-s.*の内容は以下のとおりである。

あるとき釈尊は釈迦国のメーダルンパと名づける釈迦族の町 (nigama) に住された。そのときパセーナディ王がある所用でナガラカ (Nagaraka) にやって来た。パセーナディ王はディーガ・カーラーヤナに車を用意させ、庭園の地に向って、そこで釈尊のことを思い起した。王が彼に「釈尊はどこに居られるか」と尋ねると、彼が「ナンガラから 3 由旬の距離にある釈迦族の町メーダルンパに居られます」と答えたので、早速、王は釈尊のもとへ赴いた。ときに王が釈尊のもとへ到着すると、仏足頂礼をなしたので、釈尊は理由を尋ねられた。すると王は「釈尊の弟子である比丘たちが終生清浄の梵行を修し、僧伽が和合し、比丘たちが柔和な心を持ち、釈尊の説法中は静粛であり、釈尊に反駁しようとした者でさえも、教えを聞いて弟子となり、出家を願って阿羅漢を成就している。しかも私が雇用する工匠のイシダッタ (Isidatta) やプラーナ (Purāṇa) でさえも、釈尊に対するような恭敬の態度を私には示さない。釈尊もクシャトリヤであり、私もクシャトリヤである。釈尊もコーサラ人であり、私もコーサラ人である。釈尊も 80 歳となり、私も 80 歳となった。私は釈尊に最上の恭敬を示す」と語った。王が去って間もなく、釈尊は比丘たちに「パセーナディ王は法莊嚴を説いた。この法莊嚴を受持せよ。これは利益があり、根本の梵行となる」と説かれる。

また、『中阿含』213「法莊嚴経」の内容は以下のとおりである。

あるとき釈尊は釈迦国の中に出かけて、釈迦族の都邑である鹿堂 (Medaḷumpa) に居られた。そのとき拘薩羅国王の波斯匿が長作と共に都邑 (Nagaraka) にやって来た。王は園観の樹下で釈尊を憶い、長作に「釈尊は今どこに居られるか」と尋ねた。彼が「釈迦族の鹿堂に居られる」と答えると、王は「ここからどのくらいの距離か」と尋ねた。彼が「3 拘婁舎 (kosa)」と答えると、王は「釈尊のもとへ行こう」と告げた。かくして波斯匿王が鹿堂に至ると、門外で多数の比丘らが露地で経行していた。王が釈尊の居られる場所を尋ねると、比丘らが「東向きの大屋で昼行されている」と答えた。王は釈尊のもとに来ると、五儀飾 (剣・蓋・華鬘・珠柄の扠・嚴飾の履) を脱ぎ、それらを長作に預けて、釈尊に最勝の挨拶をした。すると釈尊は「どのような理由でそのような挨拶をされるのか」と尋ねられた。そこで王は 11 にわたる法靖、すなわち釈尊の弟子らの善き所行等々、あるいは波斯匿王に仕える梨師達多や富蘭那という大臣らの篤き恭敬心、さらに加えて「私も国王、釈尊も法王。私も拘薩羅国にあり、釈尊も拘薩羅国にある。私の年齢も 80 歳、釈尊も 80 歳である。これをもって釈尊を生涯にわたり恭敬供養する」などと語り、釈尊に対して恭敬の意を表す理由を述べた後、その場を立ち去った。釈尊は阿難に「鹿堂の林にいる一切の比丘らを講堂に集めるように」と指示された。ときに釈尊は阿難と共に講堂へ赴き、比丘らに「今、我が前で波斯匿王が説いた法莊嚴経を受持すべし」と説かれる。

(1) 法莊嚴経 vol. II p.118

(2) 大正 01 p.795 中

(3) 大正 04 p.583 上

(4) 大正 14 p.783 中

[3-2] 以上のように細部は必ずしも一致しない。ヴィドゥーダバが父波斯匿を殺して王位を篡奪したとする文献はないが、しかし王位継承を物語的に説くものは波斯匿王はヴィドゥーダバに王位を奪われたのをきっかけとして命を終えたとするから、ヴィドゥーダバに殺意はなかったとしても、結果は同じといえるかも知れない。

これに対して簡単な文書で王位継承を表すものには、王が死んでからヴィドゥーダバが即位したとするものと、ヴィドゥーダバが王を退位させてから自ら即位したとするものがある。

『増一阿含』『五分律』『義足経』『六度集経』は前者であり、『出曜経』『法句譬喻経』は後者である。おそらく『四分律』も後者に属するであろう。これには物語が付されていないから詳細は判らないが、後者は上記の物語のようなものを想定しているのかも知れない。

[3-3] この背後にある物語はともかくとして、1つ気にかかることがある。それは波斯匿王がヴィドゥーダバの即位以前に死んだのか、それとも即位後に死んだのかということである。

MN.087 *Piyajātika-s.* (1)、『中阿含』216「愛生経」(2)、『増一阿含』013-003 (3)には、波斯匿王にとって愛しい者として、ヴァージーリー童女 (*Vajīrī kumārī*) = 婆夷利童女 = 瑠璃王子、ヴァーサバー・カッティヤー (*Vāsabhā khattiyā*) = 雨日蓋 = 薩摩陀利利種、ヴィドゥーダバ將軍 (*Viḍḍabha senāpati*) = 鞞留羅大將 = 伊羅王子あるいは尸阿荼大臣などがあげられていることなどからして、波斯匿王はヴィドゥーダバを愛していたものと考えられる。またこの釈迦族虐殺伝承にはヴィドゥーダバが波斯匿王を殺したという記述もないことを考えると、ヴィドゥーダバは波斯匿王が死んでから王位を継承したと考えた方が自然ではなかろうか。

しかし前王が死んだらすぐに後継の王が即位するのが普通であろうから、むしろ波斯匿王の死即ヴィドゥーダバの即位と考えた方が現実的であるかも知れない。

(1) vol. II p.106

(2) 大正 01 p.800 下

(3) 大正 02 p.571 中

[3-4] ところで先に引用したように、MN.089 *Dhammacetiya-s.*、『中阿含』213「法莊嚴経」では波斯匿と釈尊が「私もあなたも 80 歳」という会話を交したになっている。

また『増一阿含』026-006 (1)にも、

そのとき阿難が釈尊のもとを訪れ、両手で釈尊の足を摩りながら老化された身体を嗅いだ。釈尊は「阿難よ、身体を受ければ、病のために追いたてられる。病むべき衆生は病のために苦しめられ、死すべき衆生は死のために駆られる。今日、如来はすでに衰退し、年 80 を越えた」と語られる。そして釈尊は阿難と共に乞食のため、舎衛城の波斯匿王の家に向われる。

再び精舎に戻られた釈尊は比丘たちに「年をとること、病を得ること、寿命を得るも命終すること、恩愛別離することを世間の人々は喜ばないが、これにより生死を流転して五道を廻る。若し、戒と三昧と智慧と解脱との四法を覚らなければ、生死を流転するが、この四法を覚知するならば、生死の根を断ち、更有を受けない。今、如来の身体は

老い衰えた。それ故に比丘らよ、永寂、涅槃、不生、不老、不病、不死を求め、恩愛別離に無常の変を思うべきである」と説かれた。

とされており、ここでも波斯匿王は釈尊 80 歳の時に存命していたように描かれている。

しかし [1] に紹介した伝承では、ヴィドゥーダバの即位直後に王は釈迦族を攻め、虐殺したとされ、釈尊はこの後も存命していたとされている。したがって明らかに波斯匿王は釈尊よりも前に死んだことになる。したがってもしこの釈迦族虐殺が史実であったとするなら、そして釈尊は 80 歳で亡くなったのであるから、メーダルンパで波斯匿王が「私も 80 歳、世尊も 80 歳」と語りかけた時点では、少なくとも釈尊はまだ 80 歳にはなっていないわけである。そうするとここでいわれる「80 歳」は概数であって、正確な数字ではなかったということにならざるをえない。

それはともかくこの時には波斯匿はまだ王位にあって生存していたわけであるから、死んで王位がヴィドゥーダバに移ったのはこの後ということになる。そしてこの後に釈迦族の虐殺があり、そして『涅槃経』の描く釈尊晩年につながるのであろうが、その時間的経過をどのように考えたらよいのであろうか。

まずメーダルンパで波斯匿王が釈尊と会見したのは、舎衛城で釈尊が雨安居を過ごされた前後であろう。

そしてその後しばらくして波斯匿王が崩御してヴィドゥーダバが王位を継承した。これは波斯匿王が釈尊と会見した時から半年くらい経過していたと考えておいたら如何であろうか。

そしてその直後にヴィドゥーダバは釈迦国に攻め込もうとするが、釈尊は枯樹の下でこれを留めようとしたとされるから、この時も舎衛城に滞在されていたのであろう。

そして釈尊は出胎から数える満年齢で 80 歳の誕生日を迎えられた日にクシナーラーの沙羅双樹のもとで入滅された。この前年の 79 歳の雨安居は釈尊はヴェーサーリーの近郊の竹林村で過ごされ、われわれはその前年の 78 歳の雨安居は王舎城で過ごされたと考えているから、波斯匿王が釈尊にメーダルンパにおいて「我も 80 歳」と話したのは、ぎりぎりと考えてさらにその前年の釈尊 77 歳の時のことになる。先に記したように、メーダルンパで波斯匿王が釈尊に会見したのは釈尊が舎衛城において雨安居を過ごされた前後としたから、そうすると釈尊は 77 歳＝成道 43 年の雨安居は舎衛城において過ごされたことになる。そしてこの雨安居を終えた後は、王舎城に遊行されなければならないから、そう時間的に余裕はなかったはずである。

このように考えると、**釈尊がメーダルンパにおいて波斯匿王と会見されたのは釈尊が 77 歳＝成道 43 年の雨安居前（古代中国暦で 4 月ころ）のことになり、波斯匿王が死んでヴィドゥーダバが王位を継いだのはこの雨安居後（10 月ころ）のことであった**ということになろう。その後すぐにヴィドゥーダバが軍を起し、釈迦国に侵攻しようとしたので、**釈尊は枯樹の下でそれを阻止され（10 月中旬から 11 月中旬にかけて）、その後王舎城に向けて出発され（11 月中旬）、翌年の 2 月中旬に王舎城に到着された**という時間的経過になるのではなかろうか。

(1) 大正 02 p.637 上

[4] 次に釈迦国とコーサラ国の武力衝突の規模を考えてみたい。先に紹介した伝承では

釈迦国において大虐殺があったということでは共通しているが、具体的にはそれによって釈迦族は絶滅してしまったと考えるべきなのであろうかということである。それを表すのは先に資料を紹介したなかに記した①あるいは②という番号の部分である。これはヴィドゥーダバが釈迦城内に侵入して虐殺が行われたが、マハーナーマによるけなげな行為などがあって、最終的に釈迦族がどうなったかという状況を表したところである。

先に紹介した文章を(1) 釈迦族が存続したとは読めない「全滅型」と、(2) 釈迦族が存続したと読める「半滅型」に分けて示す。後に残された者があったとしても、種族の存続には数百人単位では難しかろうと考えるので⁽¹⁾、このようなものは「全滅型」に入れた。

(1) 全滅型

『増一阿含』034-002：このとき流離王は9,990万人を殺し、迦毘羅衛城を焼いた。また王は500人の釈女を犯そうとしたが、女たちは「なんぞ婢生の種と情通せんや」と拒否したので、王は女たちの手足を截り、穴に埋めて、舎衛城に還った。……

500の釈女は「仏は私たちの苦悩を憶せられないのか」と歎いた。釈尊はこれを天耳をもって聞いて迦毘羅衛城に向かわれた。そして縁起・施論・戒論・生天の論・四諦を説かれたので女たちは法眼淨を得て命終して天上に生まれた。釈尊は比丘らに、「この尼拘留園は昔は広く法を説いたが、今は空虚にして人民がいない。今より以後は再びここには来ないであろう」と説かれ、舎衛城の祇樹給孤独園に行かれた。

『十誦律』：ときに阿難のもとに2人の親里の子が逃れて来たので、彼は2人を残食で養畜した。

Jātaka-A. 465：毘瑠璃は釈迦族の者全部を殺し、彼らのどの血をもって座を洗い浄めて舎衛城に還った。

『出曜経』（大正04 p.624中）：7万の釈種の須陀洹果を得た者たちを地に埋め象に踏み殺させた。

『出曜経』（大正04 p.746下）：瑠璃王は迦惟羅竭国を攻伐して人民を摧破し、7千を生け捕りにし、聖果を得た者についてはその足を地に埋め象に踏み殺させた。

『義足経』：王はこれを知って城中の諸釈を捕らえ、悉く象に踏み殺させた。

『法句譬喻经』（大正04 p.583上）：瑠璃王は舎夷国も伐ち、釈種の道跡の人を殺害した。

『法句譬喻经』（大正04 p.590下）：瑠璃王は3億人の舎夷国人を殺した。目連は4、5千人の舎夷国人を救ったことを世尊に報告すると、世尊は確認してみよという。行って鉢の中を見るとみな死んでいた。

Bigandet：野心の多い阿闍世王のためにコーサラ (*Kosala*) およびカピラヴァットゥ (*Kapilawot*) の釈迦城が全滅させられたのはブツダ成道後44年、メータドゥッパ王の治世の時であった。

『大唐西域記』：毘盧釈迦王は釈氏の一族の9,990万人を捕え、皆殺しにした。

(2) 半滅型

『四分律』：王は彼を水から出させ、彼の身命を惜しまない行為に慈心を生じて、釈迦族の人々を解放した。

『五分律』：これに感じた王は釈種を許した。

『根本有部律』「雑事」：この間に過去時に善根を行じた者はあるいは末羅国に行き、あるいは泥波羅に、あるいはその余の聚落城邑に行った。……

悪生王が釈迦族を誅したとき城中に多くの瓔珞・鍔釧の装身具があった。釈迦族の女性たちは悲しみ、悲しい記憶を思い出させる瓔珞・鍔釧の装身具を僧伽に布施した
Dhammapada-A：マハーナーマに従う者たちは助命された。齒に草の葉をはさんだ者たちは草釈迦族 (Tinasākiyā)、葦をもった者たちは葦釈迦族 (Nalasākiyā) として知られるようになった。

『六度集経』：王は釈摩南が身を殺して人々の命を請うたのを思っていたみ悲しみ、軍を退かせた。……

後に仏はこの地に行ったが、すでに死んだ者あり、肘や足を失った者もあったが、仏法僧に帰命した者もあった。

『仏説瑠璃王経』：王はこれを憐れみ、慈哀の心を起して3億人の命を助けた。

このように描写は大きく2つに分かれるが、どちらかといえば(1)の「全滅型」は簡単に記述する文献に多く、(2)の「半滅型」は詳細な描写がある文献に多いということができよう。しかしこのような伝説的なものは著しく誇張されて表現されるのが通例であって、よく知られるように釈尊入滅後の葬儀において釈迦族は舎利の分割を受けて仏塔を造立したとされているから、釈尊入滅時にも釈迦族が存在したことは確実であるし、比較的史実に近いものを伝えるパーリの原始聖典や漢訳の『長阿含』『中阿含』『雑阿含』『別記雑阿含』にこの伝承がなく、さらに仏伝経典にすらこれがないというのは、釈尊の晩年に釈迦国とコーサラ国に武力衝突があったけれども、それほど大きなものではなかったため、これを記さない文献と、それを大袈裟に誇張した文献の2つに分かれたのではなかろうか。一方、舎利八分の中にコーサラ国が含まれないのは、釈尊の入滅前に釈迦族との武力衝突があったからであるかもしれない。

- (1) インド社会では、種族はそのままがカーストのようなものであり、同種族の間で婚姻を繰り返しながら種族が存続していく。したがって5人、10人の釈迦族が残っただけでは種族は存続しえないといっただいであろう。しかしこの事件があつてからわずか2年ほどの後に釈尊が入滅され、そのときに釈迦族は仏舎利塔を立てたのであるから、種族と称するだけの人数の釈迦族の人々が残されたのは確実であろう。

[6] 以上をまとめ、結論的なものとしたい。

[6-1] まず上記資料によって、釈尊の最晩年に釈迦国とコーサラ国に武力衝突があつたのも事実として認めてよいであろう。それは波斯匿王の死後のことであり、また釈尊が入滅される数年前のことであつた。したがって波斯匿王は釈尊の入滅よりも若干早くに亡くなったことになり、波斯匿王は釈尊と「私も80歳、世尊も80歳」という会話を交したことになるが、それは概数であつて、しかもおそらく入胎を誕生日とする年齢であつたであろう。入胎を誕生とする年齢は出胎を誕生とする年齢に約1歳を加算したものとなる。先に考察したように、釈尊は77歳(入胎を誕生とする年齢では78歳)＝成道43回目の雨安居を舎衛城で過ごされたが、メーダルンバで波斯匿王が釈尊と会見したのは、その雨安居に入る前のことであつた。そしてその雨安居の後に、波斯匿王は崩御したからか、あるいは家臣の策略によってかによってヴィドゥーダバがコーサラの王位を継承した。もし後者の

ケースであったとしたなら、ヴィドゥーダバが王位を継承した後に波斯匿は死んだことになるが、いずれにしても波斯匿王の死と毘瑠璃の即位はほぼ同時で、それほど時日は隔たっていないであろう。釈迦国とコーサラ国間の武力衝突は、ヴィドゥーダバ即位の直後のことであった。このように考えると**波斯匿王の死とヴィドゥーダバの即位は釈尊77歳＝成道43年の雨安居後**のことであったとしてよいのではないであろうか。そして**その直後にヴィドゥーダバと釈迦族の間に武力衝突があった**。Bigandetは釈迦族の滅亡はブッダ成道後44年の雨安居前のことであったとしている。

[6-2] しかしその武力衝突はそれほど大きなものではなかった。釈迦国はすでに長い間コーサラ国の属国であって、おそらくコーサラ王から自治権を与えられていたのであろう。現代風にいえばコーサラ国の釈迦自治区であったわけである。しかしヴィドゥーダバがコーサラ王になって、それまで波斯匿王との間に築かれていた信頼関係がなくなり、ヴィドゥーダバは釈迦国に与えていた自治権を剥奪するという動きに出たのではなかろうか。そこで釈迦族からこれに反発する動きが出て武力衝突が起った。仏教の側から見ればこのような動きはまことにけしからぬことであって、そこでヴィドゥーダバの出自やその狂暴さを強調する伝承が生まれたのではなかろうか。